

聴覚障害と音楽 だれもが楽しめる音楽を目指して : スタジオプロジェクト報告書 2022年度～2024年度

九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室

尾本, 章
九州大学大学院芸術工学研究院

長津, 結一郎
九州大学大学院芸術工学研究院

Sasa-Marie
九州大学大学院芸術工学府

他

<https://hdl.handle.net/2324/7360088>

出版情報 : pp. 1-24, 2025-04-30. 九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室
バージョン :
権利関係 :





スタジオプロジェクト報告書 2022年度～2024年度

聴覚障害 と音楽

だれもが楽しめる音楽を目指して



| | |
|----|--|
| 2 | 九州大学 × 福岡県聴覚障害者協会青年部 コンサート & 公開講座 見える音楽？ だれもが楽しめる音楽を目指して |
| 4 | コンサート「見える音楽？」レポート |
| 7 | 「見える音楽？」アフタートーク |
| 8 | 座談 それぞれの視点から振り返る |
| 11 | エッセイ みんなと一緒にわたしの“おんがく”を楽しみたい。 〈Sasa-Marie〉 |
| 12 | 公演「見える音楽？」開催までの道のり |
| 12 | 2024年度 スタジオプロジェクト 聴覚障害のある人にとってのコンサートのあり方を考える |
| 18 | 2022年度 アーカイブ きこえないあそび。きこえないムジカ。 |
| 20 | 2023年度 アーカイブ みんなが楽しめる音楽とは？ ～きこえない×きこえにくい×きこえる×音楽～ |
| 22 | 卒業生インタビュー スタジオプロジェクトで学んだこと、実社会で活かせること |
| 23 | エッセイ きこえない音楽と向き合って 〈真崎一美〉 |
| 24 | コラム 全国での取り組みの紹介 — 聴覚障害のある方と一緒に楽しむことを目指したコンサート |
| 25 | おわりに |

スタジオプロジェクト報告書 2022年度～2024年度

聴覚障害と音楽 だれもが楽しめる音楽を目指して

九州大学大学院芸術工学府では、さまざまなコースの学生が課題解決に向けて集まる科目「スタジオプロジェクト」において、2022年度から「聴覚障害と音楽」をテーマとした授業を始めました。この報告書は、その3年間の歩みをまとめたものです。

全国的には近年、劇場・音楽堂において、障害のある人に向けた情報保障が行われるコンサートが開かれるようになってきました。しかし、そのような事例はまだまだ一部の先進事例に留まっています。令和6(2024)年度の国の調査では、障害者に配慮または対象とした事業を主催・共催等の事業で行っている施設は全体の約30%という結果も出ており、推進はまだ道半ばといったところでしょう。

このような中で重要なのが、実際に障害のある人と出会い、意見をすり合わせ、どのような芸術の場をつくるのが望ましいかを共同で考案するプロセスだと私たちは考えました。そしてそのプロセスを踏むことが、今後、社会に出て活躍する大学院生にとっての共生社会に向けた経験となることも期待しました。

このプロジェクトを共催してくださっている社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会青年部の皆様、当初より支援くださっている一般財団法人曾田豊二記念財団の皆様をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

スタジオプロジェクト 担当教員

長津 結一郎

見える音楽？

だれもが楽しめる音楽を目指して



曲の演奏が終わるたび、手を上げてひらひらする手話の拍手で満たされた



「あじみずも」。
「あ」と言いながら指で
書いてみましょう

開催日時 2025年1月23日(木) 19:00～20:30
会場 九州大学大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟
参加費 無料
参加人数 124名

主催 九州大学大学院芸術工学府「スタジオプロジェクト IV-B (ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト)」
(指導教員: 尾本章、長津結一郎)
共催 九州大学大学院芸術工学研究院附属社会包摂デザイン・イニシアティブ、社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会青年部
後援 福岡市
助成 一般財団法人曾田豊二記念財団、科学研究費補助金 JP21HO3764、JP24K03222、JP23K17491、JP23K25142



「登取」。演奏している楽器に触れて音や響きを感じる



「火水の儀」。曲の委調に合わせて間合いを取る

身体／音域／アンサンブルに着目して
音楽をどう翻訳する？

演奏曲は、盆踊りのような曲調をピアノ、鍵盤ハーモニカ、オーボエ、トロンボーン、打楽器で合奏する「登取」、身体と声を使って演奏をする「あじみずも」、ピアノソロの即興曲「ピアノ音楽・第二」、「登取」と同じ楽器編成で演奏する「火水の儀」。それらに対して学生が考えた情報保障は、響きを感じる仕掛け、身体を用いた演奏体験、視覚による鑑賞体験でした。

曲の演奏が終わるたびに、会場は静かで盛大な手話での拍手に包まれました。



「ピアノ音楽・第二」。
演奏中の音楽を波形とライブ映像を見ながら鑑賞しよう



音楽の中にある音ではない何かを伝える。

学生たちがさまざまに仕掛けた

工夫にあふれるコンサート

「登取」。演奏している楽器に触れて音を感じる

コンサート 「見える音楽？」レポート

リハーサルで最後の調整。念入りに

2025年1月23日木曜日。19時からの本番を控え、14時30分から各演目を本番どおりに通すリハーサルが行われました。まずは「あじみずモ」。演奏前の導入として、「音楽をつなげてみよう」というタイトルでワークショップを行うことになりました。リハーサルでは演奏者の一人、河合拓始さんから身体の動かし方についてアドバイス。小さかった動きがのびのびとした動きへと改善されました。

「火水の儀」は授業中に考えていた手法から一転して、ペットボトルに光を当てたり、ライトセーバーのように光を放つものを制作して演奏をするという表現を考案。一同びっくりしましたが、動き方について再度話し合われ、今まで以上に曲と演奏者を意識した動きになりました。

「ピアノ音楽・第二」では、演奏している様子を複数

の映像で収録し、音声を波形に変えた画面と合わせて投影するという情報保障を考案しました。リハーサルでは機材トラブルもありましたが、ライブカメラの画角や音の波形の見せ方について念入りに調整をしました。

開演1時間前、18時を過ぎたころからお客さんが集まり始めました。18時30分に開場すると、想定していた以上の観客が来場され、みるみるうちに客席が埋まっていきました。ステージ脇のスペースで緊張している学生たち。

19時に、司会のSasa-Marieさんの手話でのあいさつからスタート。担当教員の尾本章先生からのあいさつあと、いよいよコンサートの始まりです。



「ピアノ音楽・第二」より

見たり触ったり、 4曲4様の音楽鑑賞

1曲目の「登取」では、観客は、風船を持って演奏者に近づき、演奏中の楽器に直接手で触れたり、風船を近づけてみたりしながら鑑賞しました。ピアノの下に潜ってピアノの音を頭の上から感じようとしている人や、ピアノの弦に風船を近づけて響きを感じようとしている人の姿も見られました。

2曲目は「あじみずモ」。「あ」「じ」「み」「ず」「も」とそれぞれの文字を声に出しながら、その文字の形を指や身体でなぞる、という一風変わった楽曲です。まず学生が登場し、声を使わない伝言ゲームで観客の注目を集めました。そのあと、身体を使った演奏のやり方を、演劇的なワークショップを取り入れた解説とともに体験できるような時間を提供しました。最後は河合さんが登場して観客参加型での演奏を試みました。

3曲目は「ピアノ音楽・第二」。図形楽譜という、五線譜ではない楽譜を河合さんのピアノソロで演奏。演奏者が弾く鍵盤の手元や、ピアノの内部を演奏する様子をライブカメラで映し出し、同時に音をスペクトログラムで可視化して映すことで、目で見える鑑賞方法を提示しました。また、風船を持って客席で鑑賞する方法も試みられ、観客は映像と振動を同時に体験しながら鑑賞しました。

最後の曲は「火水の儀」。アンサンブルの演奏を保障するために、奏者一人ひとりの後ろにスタッフが立ちます。スタッフは水とラップを入れたペットボトルを持ち、それに下からライトを当てて点滅させることで、それぞれの楽器が演奏している旋律を表現しました。また、ステージ中央には、曲の大きな流れや雰囲気を表すように、作務衣を着た2人が、光を放つ刀を振りかざすような演舞で表現しました。暗闇に映し出される演奏者と、浮遊し点滅する光、身構えたり一戦を交える赤と青の光が、「見える」音楽として鑑賞されました。

「登取」。演奏しているピアノに風船で触れて響きを感じる



上：「あじみずモ」。音楽をつなげてみようとして説明する学生たち
下：「火水の儀」。楽器が奏でる特徴的な音を光の点滅で表す

コンサートを終えて

近年、情報保障が行われるコンサートがさまざまな形で試みられ始めています (p. 24 参照)。今回の演奏会では、その中でもあまり試みられることの少ない現代音楽を取り上げ、聴覚障害のある人へ向けた情報保障の実験を行いました。

近代以前のクラシック音楽やポピュラー音楽に対する情報保障は少しずつ試みられていますが、現代音楽をあえて取り上げた理由は、現代音楽にある身体性や音だけではない何か伝わりやすく、それらが聴覚障害者と音楽について考える上で大事なのではないかと考えたからです。今回、音とテクノロジーによる可視化や、音の身体性の共有、身近なものを使った音楽の共有方法が提示できたことは、新たなチャレンジへの足掛かりになりました。

九州大学芸術工学部のスローガンの一つに「技術の人間化」があります。技術だけでなく、人の力だけではない、それらをどのように融合させていくのか、これから先も大きな課題としてありますが、次年度も取り組んでいきたいです。

* スペクトログラム：音波を周波数成分に分解して、時間軸に並べたグラフ



左から長津結一郎先生、河合拓始さん、Sasa-Marieさん、鈴木玲雄さん

ディスカッション

河合さん

私自身、音と言葉と身体は根っこでつながっているという感覚を持っていて、今までいろんな側面から創作や演奏にトライしてきました。今回、学生にとっては高いハードルだったかもしれませんが、私にとってもチャレンジであり、刺激でもあり、とても興味深いプロセスでした。

鈴木さん

特に印象に残ったのは「火水の儀」で、先週のリハーサルでは単調な表現方法でしたが、本番では機械ではなく人間の手で光を動かすという表現方法がとても面白くて、奏者そのものを壊さない形の情報保障のように感じ、また1つの作品のようにも見えました。

Sasa-Marieさん

聞こえない世界へ音楽を届けるということは、ちゃんと翻訳をしなければならず、今回は、目に見える形の音楽に翻訳することを試みた成果として大きなものがあつたと思います。スクリーンへの映し方や身体的動きの工夫について、もっと考える時間があつたらよかつたかなとも思いますが、今できる最大限の努力の中でやったチャレンジングな試みだったと思います。

福岡県聴覚障害者協会青年部からの感想

渡邊さん

聴覚障害があることは見た目ではわからないため、コミュニケーションの壁があります。今回、学生と話し合う中でいろいろな質問をいただき、いろいろな工夫を考えていただきました。コンサートでは、その効果を見ていただけたと思います。

穂田さん

今回、学生たちと一緒に考えて本番を迎えたわけですが、これで終わりではなく、これを参考に今後もこういった表現を生活の中でも使えるようになったらいいなと思いました。

久住呂さん

今回、学生たちと取り組む中で、初めは図形楽譜というのがどういう音楽なのか難しくてわからなかったのですが、今日のコンサートでは「見てわかる音楽」になっているなと感じました。

徳田さん

ふだんは演奏の盛り上がりわかりません。今回は音はきこえませんが、赤や青などの光の動きによって、「いま盛り上がったんだろうな」と見て楽しめました。日常でもこういうふうにいるいろいろ見られたらいいなと思いました。

鑑賞者アンケートより

- いろいろな表現方法があつて面白かつたです。音が減衰する様子や無音などを目で見て、音の不思議を改めて考えました。
- 身体的感覚を通して音を楽しむ体験ができ、音を楽しむとは何か、という問いが生まれました。
- 実際に目で見ることで「盛り上がる」体験が得られたことに喜びがありました。身体を動かして、体温が上がることで、演奏のボリュームを感じる事ができました。
- 「あじみずも」や「火水の儀」は音を耳だけでなく目で見て楽しめるので、きこえる人もきこえない人も楽しめると思いました。もっとこのような音楽のあり方が広まってほしいと思いました。
- 「ピアノ音楽・第二」の演奏と映像の情報保障が合っていて、演出としての効果を感じられました。また、音のうねりが視えて体験できました。
- 最初は「普通のコンサート」の意識が強かつたのと、「聴覚障がい者を優先せねば」という遠慮の気持ちがありましたが、2曲目の「あじみずも」が参加型で、ここから「聴覚障がい者ではない私もやっていいんだ」「コンサートって静かにおとなしく座ってなければいけないなんてことないんだ」という気持ちになれました。
- トークイベントでのお話は、とても参考になりました。特に「通常の曲を、形を変えずに伝えるのはムリ、翻訳が必要」というのは目から鱗（うろこ）でした。

曲目紹介

解説文：河合 拓始

河合拓始「登取」(2024)

ピアノ、鍵盤ハーモニカ、オーボエ、トロンボーン、打楽器による合奏曲。盆踊り風リズムによる。題名は、意味ではなく音からつけた造語。2024年12月、コンサート「四行妙道の楽・一具」で初演。

河合拓始「あじみずも」(2018)

文字の姿形を、身体と声（文字の発音の発声）でなぞる趣旨の作品。楽譜によらず、指示書きによるインストラクション・ピースである。何人で上演することも可能。

一柳慧「ピアノ音楽・第二」(1959)

一柳慧（いちやなぎ・とし、1933～2022）は、現代音楽の作曲家。この曲の楽譜は、いわゆる五線譜ではなく、図形楽譜である。四枚の正方形の紙にさまざまな図形が記されている。

ひとつひとつの図形の読み取り方（音への変換法）には指示があり、中心の小円が白色の場合は通常の鍵盤上の演奏、黒色の場合はピアノ内部の演奏（弦を直接はじく等）で、小円から伸びる線の方向が演奏音の音域を示している。音の具体的な高さや、音量、ペダルその他は、演奏者のその場での裁量に任されている。

ひとつの図形から次の図形への移る手順には、ルールが設定されているが、実際どのような進行になるかは都度の演奏で結果は異なることになる。スポーツやゲームのルールと同じように。音や演奏を、作曲家の意図だけで縛らず、演奏家の自由を尊重し、一回限りのその場での出来事として音に接するための仕掛けである。

河合拓始「火水の儀」(2024)

「登取」と同じくピアノ、鍵盤ハーモニカ、オーボエ、トロンボーン、打楽器による五重奏曲で、2024年12月に初演したばかりの作品。

協力



社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会青年部

渡邊 梨乃 わたなべりの

穂田 誠 あきたまこと

久住呂 文華 くじゅうろ あやか

徳田 貴昭 とくだたかあき

池田 鈴 いけだりん

福岡県内に住む35歳以下の聴覚障害者で構成される団体。聴覚障害は、見ただけではわからない「目に見えない障害」ゆえに、学校や職場、日常生活においてコミュニケーションの壁を感じていたり、情報格差に対する不便があつても周りに認知されにくい現状がある。青年部では、日常を快適に過ごせるよう、同士が集まって気持ちを共有し合い、聴覚障害者への理解促進のために活動を行っている。

※プロフィールは2025年3月現在のもの

演奏者



〔作曲、ピアノ〕河合 拓始 かわいたくじ

東京で長く活動したあと、2012年より福岡県糸島市在住。現代音楽と即興音楽のフィールドを中心に、作曲、ことば表現やパフォーマンスなど活動は多岐にわたる。関東・関西・九州・欧米で演奏。



〔打楽器〕上野 ゆみこ うへのゆみこ

学生時代より独学でドラム・パーカッションを学び、ジャズ、ロック、ラテンなど、さまざまなジャンルの演奏を経験。これまでに福岡・東京・長崎・山口・佐賀のジャズクラブ、ホテルなどで多様な演奏経験を持つ。



〔トロンボーン〕内田 遼 うちだりょう

福岡を中心に活動するトロンボーン奏者、音楽講師、地域音楽コーディネーター。ポピュラー音楽、特にキューバ音楽やラテンジャズをメインに演奏や作編曲を行う。これまでに中洲JAZZ、Isla de Salsa、JAPAN LATIN MUSIC FESTIVAL “timba” などに出演。



〔オーボエ〕梶 大也 かこいまさや

専門は音楽学、歴史学。在学中は九大フィルハーモニー・オーケストラに在籍し、オーボエ、学生指揮を担当。その後は芸工アヴァンギャルド・コンソート等で古楽、現代音楽の演奏を行う。九州大学大学院芸術工学府博士後期課程在学中。



〔鍵盤ハーモニカ〕長津 結一郎 ながつ ゆういちろう

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。ピアノ、吹奏楽、オーケストラなどの経験を経て、複数のインディーズバンドのサポートや、ライブハウスでの音楽サークルの指導、アートプロジェクトにおける即興的音楽活動などに取り組む。九州大学大学院芸術工学府准教授（アーツマネジメント）。

トーク登壇者



鈴木 玲雄 すずきれお

社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会／キコエナイ×キコエル発展事業委員会。2歳半ごろ、混合性難聴となる。滋賀県立聾話（ろうわ）学校幼稚部卒業、普通学校に進学。高校時代に演劇部の文化祭発表に惹かれ、俳優活動を始めると同時に手話を学び始める。2004年に「福岡ろう劇団博多」入団、2014年から同劇団主宰。福岡市在住。



Sasa-Marie ささまりー

Sign Poet（手話の「てことば」で詩を紡ぐ人）、Signed Musician（手話をベースにサイレントなおんがくを奏する人）。てことば、からだ、こえ、おんがくなど五感で感じる立体的な詩の空間を構築するライブを展開。九州大学大学院芸術工学府博士後期課程在学中。本プロジェクトの講師を担った。

河合 拓始 かわいたくじ

長津 結一郎 ながつ ゆういちろう

それぞれの視点から振り返る

渡邊 梨乃（福岡県聴覚障害者協会青年部）
 鈴木 玲雄（「福岡ろう劇団博多」主宰）
 河合 拓始（ピアニスト、作曲家）
 長津 結一郎（スタジオプロジェクト担当教員）

▶ プロフィールは p.6 参照

コンサート「見える音楽?」、そして3年間のプロジェクトを終え、関わりの深かった4人がそれぞれの視点で振り返り。コンサートやプロジェクトで感じたことから、次へのステップにつながる話までふくらみました。

音楽の情報保障のあり方って？

長津 まずは、「見える音楽?」について振り返ります。特に印象に残ったことを教えてください。

鈴木 コンサートに参加されていたろう者のお一人が「ピアノ以外の楽器で音を感じたのは初めて」と言われたんです。ピアノは身近な楽器で大体のイメージはつかめていたけど、それ以外の楽器は見る機会があまりなかったそうで、ここで初めてそれらの音を知ったというのが印象的でした。

渡邊 私は、情報保障として図形楽譜と指示書によるピアノの即興演奏を見せるのは難しいかもと始まる前まで思っていました。でも実際は、高音低音を強調することで技術的にはっきり見えるようになり、きこえる人もきこえない人も曖昧な音までわかったように思います。自分ではきき取れない微かな音も映像でちゃんと見えたのがよかった。

長津 確かにきこえる人にとっては微かな音から大きな音まで幅広くあるけど、きこえない人にとってどこまで伝わっているかわかりません。だからコンサートでひと通りやったけどまだ知らないことがいっぱいあると気づき、驚きました。

鈴木 今回ちょっと残念だったのは、図形楽譜による即興演奏で曲がなかった。というかあったんですけど、



なかった。このようなとき、きこえない人ってどう受け止めたらいんでしょう。「奏者の思い」という情報保障が私たちにとっての音楽ではないのかなと思いました。つまり、きこえてくる音の情報保障ではなく、奏者がどんな思いで弾いているのか。きこえる人にはお任せになるのかもしれないけど、きこえない人はどう感じたらいいのか。音の情報保障として赤や青い光を出しても奏者の思いまでは表せません。この3年間を通して行き着くところはそこにあるように思います。

河合 今回のテーマには、かなりさまざまな要素が複合していると思います。その中で特に印象に残ったのは、Sasa-Marieさんの「きこえる人にとっての音楽と、きこえないもしくはきこえづらい人にとっての音楽は、それはまたちょっと違う音楽なんだ」という言葉でした。今回の

コンサートはきこえる人にとっての音楽をどう情報保障していくかがテーマであり、当然そこには音と音楽をどう翻訳するかが一番大きかったように思います。僕自身、演奏家として新しいこれからの音楽を作りたいと思って活動しているので、今回のような音楽の情報保障を考えると、もっと「ろう者の方に届ける音楽」というように考え直して、新しい音楽を作っていきたいとすごく思いました。

複合的な音楽におけるわかりやすさ

長津 やってて歯がゆかったのは、演奏家の人たちとのやりとりが非常に浅くなってしまったことです。もうちょっとそこにしっかり時間が取れたならば、鈴木さんが言うような奏者の思いみたいなものを可視化できるかもしれないし、ほかのチャレンジもできるかなと思います。

河合 一口に音楽って言ってもかなり多様です。今回はあまりふつうの音楽はありませんでした。どうしても一般社会ではクラシック的な音楽が想定されます。でも、クラシックのように聴覚の要素のウエイトが必ずしも高くない、より身体的な音楽もあります。そういう意味でも音楽そのものがもともとかなり複合的な、たくさんの感覚を使う芸術表現であり、その中で音楽のあり方を模索していけるんじゃないかなと。そこから逆に、今あるほかの音楽を伝えることにも何かいいフィードバックができそうな気がします。もう一つ、今回は学生が情報保障を考えるということが一番のポイントで、すごく意義があるものだったと思います。

長津 今回の感想で、すごく面白いと言ってくれる人がたくさんいる一方で、これはまだ音楽の翻訳にはなってないんじゃないの? という声もありました。音楽に見えるようにすることをもっと深く考えると、もっといろいろなことをしていかなくとも思うけど、そのバランスが難しい。やっぱり授業なので、このプロジェクトで一番大切だと思うのは、学生一人ひとりが自分の当たり前に気づき、そしてどれだけそうでない人がたくさんいるのかに気づくこと。その題材としての「聴覚障害と音楽」というテーマだと思っています。



鈴木 もし来年度またやるとしたら音楽のジャンルを、たとえばジャズとクラシックの2種類を用意するなど絞るといいのかなと思いました。

長津 それも一つの方法かなと僕も思います。でも、わかりやすくして簡単でやりやすい一方で、既存の音楽ジャンルにこだわらない方法も考えたかった。

河合 鈴木さんが言ったように、どんなふうにも多様な音楽があるかを知らなかったりとか、きこえる人でも世の中にこんな音楽があるのかってびっくりする場合もあると思います。僕でもあります。

長津 前提として、今回やったような音楽をきこえる人がみんな知ってるかという点と違うんですね。たぶん図形楽譜のことを知ってる人は、きこえる人の1%ぐらいだと思います。

鈴木 あれ、めちゃくちゃ難しかった。それと私は、映像を使う視覚の音楽って奏者の顔もはっきり見えるといいなと思います。楽しんで弾いていると思うんです。その状況を見せることも、きこえない人からしたら音楽になるのかもしれない。

河合 そう。僕が言いたかったのは、世の中にはさまざまな音楽があって、クラシックやジャズよりも、もっとこういうアクセシビリティを考えていくのに向いた音楽というか、わかりやすい音楽が何かほかにある気がするんです。

プロジェクトの振り返り。反省からの気づき

長津 プロジェクトを振り返る視点でご自身の考えとか感じ方が変わったこと、あるいはこのプロジェクトをこれからやってく上でどういうところに限界があると感じましたか。

渡邊 私は去年からこの講義に参加していますが、音波? だったかな、聴覚障害者としては、音の仕組みがよくわからない状況で専門的な言葉がいっぱい出てきたし、学生にも質問されました。そのあたりがイメージできないまま、またコミュニケーションも取れないまま終わってしまいました。

宴」▶ p.19 参照）があります。たくさんの小さな正方形の蓄光テープを天井から吊るし、真っ暗な、静かな部屋の中でそれらが風に揺れる空間を作ったものです。参加者も蓄光テープをつけた軍手をはめ、キラキラ光るかけらとともに空気をかき混ぜながら、目と呼吸で楽しむ時間と空間となりました。それは、多くの発表が「音の存在」「音から受け止める聴こえる人の概念」や「オノマトペ」など、すでにある音を情報として伝えようとする試みのなかで、音楽を構成する要素を根本的に問い直すものでした。音ではない“おんがく”の現象を表象させ、視覚的な情報として変換し、ろう者の感覚に歩み寄ろうとしている印象的な作品でした。

今年度は、コンサートのために用意された素材が河合氏の現代音楽の作品であり、「楽譜」と称された図形譜や、楽器ではなく声や身体だけで発する演奏方法に、それは音楽なのか？という問いに学生がまず対峙する必要がありました。そのうえで、この「音楽」をなんらかの「情報」の形に再構成し、最終的にコンサートの場合をインクルーシブにするという難易度の高い取り組みでした。当日までの紆余曲折を経て無事に実装に至り、多くのろう者、聴者の観客と一緒に楽しんでいただける環境を実現させました。

音楽の場において、ろう者が自分の求めるアクセシビリティに関して意見を伝えることのできる場は、まだほとんどありません。本取り組みでは、どの年度も、ろう者と聴者、双方向からフラットに意見を述べ、検討を重ねてきました。実装に向けて、話し合いや伝え方、全体として配慮すべきこと、「何をどのように受け止めているか」の相互理解のための実践としても稀有な取り組みだと言えます。

音楽を、ありのままの自分で、もっとみんなと一緒に楽しみたい。その願いが実現する日ももうすぐそこです。

わ たしはろう者です。耳を通じて音を受感できる範囲は限られていますが、音楽、特にクラシックやミュージカルが大好きです。

現在、ろう者当事者として、二つの観点から研究を進めています。一つは、ろう者にとっての“おんがく”とはなにか、という問いです。この場合の“おんがく”はあえてひらがなにしています。聴こえる人たちが音符として落とし込む五線譜や、音階やピッチで表象される音に限定されない、ろう者が目や身体で受け止めるおんがくの間を感ずる観点です。

もう一つは、聴こえる人たちによって構成され、演奏され、調性される聴こえる世界の文化である音楽を、どのような方法でろう者に伝え、「一緒に楽しむことができるか」という音楽のアクセシビリティの観点です。

二つ目の観点を考えるときには、受け手としてのろう者の感覚という一つ目の観点を踏まえる必要があります。この二つは切っても切ることができません。

音楽のアクセシビリティは、ともすれば「感動を伝える」手段として用意されがちですが、「感動」は伝えるものではなくひとりひとりが自ら感じるものです。アクセシビリティの役割は、そこに何があり、何が起きているか、という情報を伝えることです。ひとりひとりが各々の感動ポイントで主体的に感動できる方法を考えるため、本取り組みでは当事者と意見を交わしつつ挑戦したことで、非常に有機的な実践につながりました。

先行研究では、音を振動に変換して伝えようとする多様なデバイスが開発され、実用化されています。しかし、振動デバイスは、音楽の一部を伝えるにすぎません。「振動は音楽なのか」という疑問を当事者自身が持つこと、音楽とは何か、自分は何を受け止めているのか、を参加するろう者自身が改めて考える機会でもありました。

学生たちが提案したアクセシビリティの手がかりはいずれも秀逸なものでしたが、令和4（2022）年度の初めての発表会で、忘れられない作品（「風



Sasa-Marie ささまりー
[▶ p.6 参照]



きこえない人ときこえる人で一緒に考えることが大事（渡邊）

招き入れる関係から一緒にやる関係に

長津 今回のプロジェクトは、やはり河合さんだ!とお誘いしました。ご自身は何か変化はありましたか。

河合 こうやって実際にお話しする機会がなかなかないので、今日お話しできたのが一番良かったです。でもまだまだです。より深く知りたいということが、すべてを通して一番感じたことです。

長津 きこえない人に向けてコンサートをすることって、ほとんどなかったのではないかと思います。現場の感覚としてふだんと違いましたか?

河合 ふだんやっている曲や演奏を持ってきたこともあり、あまり変わりありません。ただ実際に、きこえづらい方、きこえない人に向けて音楽を届ける現場は初めてだったので、すごく新鮮でした。

長津 渡邊さん、鈴木さんはいかがでしょう。

渡邊 情報保障について、きこえる人ときこえない人で一緒に考えていくことが大事かなと、改めて感じさせられました。

鈴木 今年度はきこえない人ときこえる人、学生と青年部の共同作業は、これまでより多かったと思います。だけど青年部としてのスタンスというか、どういう内容にしているかがたぶん足りなかった。学生たちにもきこえない世界やきこえにくい人のコミュニケーションについて初日に説明したけど、すぐに理解できるわけではない。やっぱり会話が必要です。一緒に作業する期間はあったけれども、最終形が私たちも見えてなく、最初の段階でこういうイメージでいきたいとこちら側もわかっておく必要があったのかなと思います。

長津 青年部のみなさんが足りなかったとは僕は思っていない。やっぱり時間感覚の違いもあるし、そもそも対等というよりも、その都度、大学にきてもらっている感じにお互いになっているなと思うんです。もちろん授業なのでそうせざるを得ないんですけど、もし来年もやるとしたら、もうちょっと招き入れるみたいな関係から一緒にやる関係になるにはどういう工夫があるかなということを考えても面白いかなと思います。

長津 昨年度の講義ですね。

渡邊 今回も前半の講義では、学生がみんな机に座って話すだけの印象でした。そうではなく実践経験をまずやってから進める方が、私としてはわかりやすかったらうなという気持ちです。話し合いのときに、聴覚障害の人はみな同じと思われることがよくあります。みな状況はそれぞれ違うということをきちんと把握した上で、話を進める方が良くなっていったんじゃないかなと思います。

河合 私も賛成です。今回、何人の方にお会いしたけど、それぞれのきこえづらさの違いはまだ知らない部分が多いのでもっと知ってみたい。そこが出発点になるとすれば、よりプロジェクトが面白くなっていくんじゃないかなと思います。

長津 そうあったらいいと思いますが、でも最初に何をしたらいいんだろうなとも思います。

河合 一般の音楽ってかなり複雑にできているので、たとえば1つの楽器だけを使って音楽を奏でて、「こういう情報保障をするとどんなですか?」というように、すごくシンプルにフィードバックをもらうところから始めるなども考えられます。

長津 「あじみずモ」みたいに一緒に体験できるようなものと、きこえる人にとっての音楽を情報保障する形でやるものとの違いがあると思いますが、まずは一緒に何かやってみるところから始めた方が共感というか……何がよくなるんだろう? 何て言ったらいいのかわかりませんが。

渡邊 意見が出し合えるんじゃないかなと思います。

鈴木 参加型の場合は、きこえない人もそうじゃない人もいろんな障害を持っている人も楽しめる形ではあるからやりやすいと思います。また、きこえない人を音楽の世界に連れて行くという導入の方法としてもいい。鑑賞型の場合が一番難しく、どう進めたらいいかな。1つの楽器あるいは1つの曲をそれぞれ違う視点で情報保障し、それらを比較していくような授業になるのかなと思います。

「奏者の思い」が私たちにとっての音楽ではないのかな（鈴木）



公演「見える音楽？」開催までの道のり

ここまでご紹介してきたコンサート付き公開講座「見える音楽?～だれもが楽しめる音楽を目指して～」は、2022年度から始まった、本学での授業「スタジオプロジェクト」の積み重ねにより実現しました。ここからは、2024年度に行った授業内容をお伝えするとともに、2022年度、2023年度の取り組みについても振り返ります。

2024年度 スタジオプロジェクト 聴覚障害のある人にとってのコンサートのあり方を考える

担当教員 尾本章、長津 結一郎 対象者 芸術工学府全専攻 日程 2024年度秋冬学期



※ 各授業の全体概要のレポートをウェブ上で公開、各概要に掲載のQRコードからご覧いただけます。

第1回

映画『ぼくが生きてる、ふたつの世界』から聴覚障害を考える

開催日時 2024年10月3日(木) 18:30～20:00

ゲスト講師 港 岳彦 コーディネート 尾方 義人(九州大学大学院芸術工学研究院 教授) 受講人数 18名、オンライン20名

スタジオプロジェクトの最初となる授業では、ゲスト講師に本学教員の港岳彦先生を迎えました。授業は1部と2部に分けて行い、1部では本学・尾方義人先生による紹介のあと、港先生が脚本した映画『ぼくが生きてる、ふたつの世界』(2024年10月20日公開)の告知映像を上映し、その後、「港岳彦の教育」と題してお話しいただきました。「学生にキャラクター設定を主体的に行わせることで、多面的な視点を養うことを育むことを重視した」と港先生。ここでは別の授業で取り入れた心理学書『英雄の旅』を活用してのストーリーテリングの学びや、二人芝居の創作を通じたハラスメントの心理的理解について掘り下げていきました。

2部では、「港岳彦の表現」をテーマに、同映画の制作背景や脚本の工夫を解説。観客目線での脚本の重要性や、聴覚障害者との交流を通じた手話表現のリアリティ追求について語っていただきました。また、知的障害者の社会モデルについての議論では、コミュニケーションの本質の指摘もありました。質疑応答では、ハラスメントや字幕制作、障害者向け上映の課題が話題となり、港先生は「今回の映画はリアルな日常を表現

するために、日ごろから使っている言葉(手話)を使うことを意識しました」と語ってくれました。多様性と社会包摂の重要性を再認識できた授業となりました。



授業の様子

講師プロフィール

港 岳彦 みなとたけひこ

脚本家、九州大学大学院芸術工学研究院未来デザイン部門教授。1974年、宮崎県生まれ。代表作に映画『ぼくが生きてる、ふたつの世界』『ゴールド・ボーイ』『正欲』『アナログ』、ドラマ『仮想儀礼』など。2025年1月にはハラスメントを扱った舞台『マルコとグリーン海』の脚本も手がけた。

レポート詳細



レポート詳細



第2回

授業全体のガイダンス 過去の事例紹介と理論的なバックグラウンドについて

開催日時 2024年10月10日(木) 16:40～18:40 受講人数 12名

ガイダンスでは、まず担当教員の長津先生から授業の概要説明が行われ、続いて履修学生の自己紹介を行いました。今年度は、音響設計、未来共生デザイン、人間生活デザイン、環境設計コースの学生が参加し、また留学生も多く、幅も国際色も豊かなメンバーが揃いました。

今年度の授業のテーマ「聴覚障害者へ向けたコンサートの情報保障」が示され、学生たちは、事例としてパナソニックが製造しているボディソニック(体感音響システム)と、富士通が製造している「Ontenna(オンテナ)」を体験。ボディソニックは専用座椅子を通じて音の振動を伝えるもので、学生からは「ビートを感じられて面白い」「コンサートで役に立ちそう」といった感想がありました。オンテナはクリップ型のデバイスで、振動と光を通じて音を感じるというものであり、学生からは「芸術的な要素の伝達には課題もある」「骨伝導を活用するとよいのでは」との意見がでました。

後半は、長津先生からプロジェクトのこれまでについて主に2022年度のワークショップ企画(p.18-19参照)が紹介され、

聴覚障害者が風船の振動で音楽を感じる実験で「これは音楽なのか?」という問いが生まれたことなどが語られました。

最後に、学生たちは「相手の視点を考えることが重要」「振動だけでなくほかの感覚も考慮すべき」といった意見を共有し、音楽を伝える方法について議論を深めました。



振動と光によって音の特徴を伝えるデバイス「オンテナ」を体験する様子

第3回

福岡での聴覚障害のある人たちの活動

開催日時 2024年10月17日(木) 18:30～20:00

ゲスト講師 鈴木 玲雄、福岡県聴覚障害者協会青年部(渡邊 梨乃、穂田 誠、久住呂 文華) 受講人数 11名

福岡ろう劇団博多主宰の鈴木玲雄さんと、福岡県聴覚障害者協会青年部からの3名をゲスト講師に迎え、聴覚障害者の情報保障について学びました。この4名の講師にはこれから数回にわたっていただき、コンサートにおける情報保障についてご意見等をうかがいながら取り組んでいきます。

初めに長津先生が「どのようにすればお互いに円滑なコミュニケーションが取れるのか、考えながら授業に関わるように」と学生たちに伝えました。そして講義では、ゲスト講師たちから聴覚障害の種類や日常生活での困難が紹介され、電車や運転中の音の認識、言語習得の課題について具体的な体験談が共有されました。

中盤には「ロパク伝言ゲーム」が行われ、学生たちはゲームを通じて読唇術の難しさを体験し、視覚的な情報保障の重要性を実感しました。また、手話、筆談、音声自動文字化アプリ、電話リレーサービスなどのコミュニケーション手段についての説明もありました。

スポーツにおける視覚情報の工夫についての話もあり、たとえば、デフサッカーでは笛ではなく旗を使うことなどが紹介されました。また鈴木さんは、ろう劇団の活動を通じて、聴覚障害

者が抱える心理的障壁を演劇で乗り越える取り組みを説明してくれました。

最後に、聴覚障害者の言語習得の多様性についての議論が行われ、学生からは「言葉の理解の違いを知る機会になった」との感想が寄せられました。



授業の様子

講師プロフィール



鈴木 玲雄 すずぎれお

[▶ p.6参照]



社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会青年部

[▶ p.6参照]

レポート詳細



第4回

ワークショップ「聞こえない体験」

開催日時 2024年10月24日(木) 16:40~19:00

ゲスト講師 Sasa-Marie 受講人数 13名

パフォーマーで聴覚障害者のSasa-Marieさんを迎え、「聞こえない体験」と題してワークショップを交えながら行いました。

前半は、まず言葉を使わずにスライドやジェスチャー、手話だけで進められ、学生たちは手話ネームなどを学びながら手話に親しみました。次に、Sasa-Marieさんから「聞こえないってどういうこと?」「聞こえるってどういうこと?」という問いかけがあり、学生たちは聞こえないことに対して「孤独」「情報がない」、聞こえることに対して「会話がスムーズ」「音楽が楽しめる」という意見を述べ、それぞれの問いに対する考えを共有しました。

続いてQ&Aが行われ、学生たちはSasa-Marieさんが口パクで言った言葉を当てたり、聴覚障害者の人口が問われたりしました。また学生たちは、雑音が流れるヘッドフォンを装着して聴覚障害者の聞こえ方を疑似体験しながら、筆談やジェスチャーなどを使ったコミュニケーションを行い、聞こえる側から聴覚障害者へ向けて伝えることの難しさと、聴覚障害者が会話から情報を得ることの難しさを体験しました。

後半では、聴覚障害者の聞こえ方や国連と日本の障害者基



聴覚障害を疑似体験しながらコミュニケーションを取ってみる

準の違い、聴覚障害者の音楽鑑賞の実態が紹介されました。質疑応答では、伝わる声の出し方、手話の正確さ、言葉の学習方法について議論しました。最後に、Sasa-Marieさんは「みなさんが初めに思った、聞こえること、聞こえないことに対する印象と今は少し違う考えになったのではないのでしょうか」と言い、「聞こえない人それぞれの違いを理解し、考え続けてほしい」と締めくくりました。

講師プロフィール



Sasa-Marie ささまりー
[▶ p.6 参照]

レポート詳細



第5回

テクノロジーからのアプローチ

開催日時 2024年10月31日(木) 16:40~19:00

ゲスト講師 鈴木久晴、仁比峻輔 受講人数 13名

今回は、テクノロジーの観点から情報保障へのアプローチを考えようと、音波を利用した情報保障を手掛けているエヴィクサー株式会社から鈴木久晴さんと仁比峻輔さんを迎え、音波を活用した情報保障技術について学びました。

まず鈴木さんから、電波より制約が少なく導入しやすい利点がある音波を利用したオーディオフィンガープリントやオーディオウォーターマークが紹介されました。オーディオフィンガープリントとは、音の特徴を抽出してデータ化する技術で、音源を直接記録せずに識別が可能です。これにより、映画の字幕提供を行うアプリが開発されました。一方、オーディオウォーターマークとは、人の耳には聞こえない高周波を音源に埋め込み、スマホなどのデバイスで検出可能にする技術で、展示映像や舞台芸術での字幕提供に活用されています。最近の事例としてコンサートのペンライトを音楽に合わせて制御する技術としても活用されているなどの説明がありました。

続いて仁比さんから、映画は字幕文化が根づいているが、舞台ではアドリブやコストの問題が障壁になっていることの指摘がありました。そこから学生たちをグループに分け、舞台芸術の字幕普及率の低さについてのディスカッションを実施。授業



字幕メガネを体験

の後半では、そのディスカッションで出た意見についての打開策を協議し、最低限の情報保障の提供や録画上映などの提案が学生たちから出ました。

今回の授業では、字幕表示アプリ「HELLO! MOVIE」や字幕メガネの仕組みも紹介され、音波技術による情報保障の最前線を学ぶ機会にもなりました。

講師プロフィール



鈴木久晴 すずきひさはる
エヴィクサー株式会社取締役執行役員COO。2007年3月、九州大学大学院芸術工学府博士後期課程終了(芸術工学博士)。同大学院研究員を経て、2008年に同社研究開発事業部長に就任、2022年9月より現職。



仁比峻輔 にひしゅんすけ
2024年3月、九州大学大学院芸術工学府修士課程修了。同年4月、エヴィクサー株式会社に入社。事業本部にて字幕メガネの開発に携わっている。
[▶ p.22にインタビュー記事あり]

レポート詳細



第6回

情報保障を広報から考える

開催日時 2024年11月7日(木) 18:30~20:00

ゲスト講師 鈴木玲雄、福岡県聴覚障害者協会青年部(渡邊梨乃、久住呂文華) 受講人数 11名

聴覚に障害のある方々を講師に迎え、一緒にチラシ作成やタイトルづけをする際に配慮することなど、広報について考えました。

まず、声を使わず誕生日順に並ぶゲームを行い、そのあと、手話の数字をカウントしていくゲームをしました。手話数字を覚えてもらい、ゆっくりカウントをしていたときは、みなカウントできていたのですが、カウントのスピードが上がると手の動きが付いていなくなります。難しいながらも、場がとても和みました。

次に、1月のコンサートについての説明があり、ピアニストの河合拓始さんの紹介や、響きや振動、オノマトペなどの文字を活かす工夫の提案がされました。

チラシの作成やタイトルづけで配慮する点について考える際、鈴木さんからは「チラシでは、時間は24時間表記ではなく、たとえば『夜7時』と表記する」「『手話通訳あり』と大きく表記することが重要」といったアドバイスがありました。また、久住呂さんからは「情報保障は聴覚障害者のためという特別なものではなく、当たり前にあるもので、すべての人に伝わるものとして考えなければならない」という意見も出ました。

最後のグループディスカッションでは、英語で表記するタイトル

や、「音感時間(音を感じる時間)」といったタイトル案が出ました。それに対して渡邊さんは、「言葉の意味が難しいと興味もわかないので、わかりやすいシンプルな言葉を使ってほしい」と話しました。



グループディスカッション

講師プロフィール



鈴木玲雄 すずきれお
[▶ p.6 参照]



社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会青年部
[▶ p.6 参照]

レポート詳細



第7回

共遊楽器の創作からのアプローチ

開催日時 2024年11月14日(木) 16:40~19:00

ゲスト講師 金箱淳一 受講人数 14名

神戸芸術工科大学の金箱淳一先生を迎え、聴覚障害者や視覚障害者と共に楽しめる楽器「共遊楽器」の研究について学びました。

金箱先生は、振動や光、風を活用した楽器の開発をしています。今回の授業では、直感的に演奏できるマウンテンギターや、振動を活かしたピラシオンカホンなどを紹介してくれました。また、楽器制作におけるアイデア発想の方法として、既存の要素の組み合わせや、新しい視点での統合が重要であるなどの解説もしてくれました。

たくさんさんのデモ楽器や機器を持ってきてくれ、学生たちは実際に「クラップライト」や「ブリンクストーン」「タッチ・ザ・サウンド・ピクニック」などを体験し、そこから振動による音楽の楽しみ方を考えていきました。特に、音の響きを振動で感じる「タッチ・ザ・サウンド・ピクニック」は学生たちの興味を引き、耳のきこえに関係なく音楽を楽しむ可能性があることを示していました。この体験を通じて学生たちは、音楽がコミュニケーションツールとしての役割を果たすことも実感できたようです。

そこからさらに、金箱先生は感覚代行の概念にも触れていき、



共遊楽器を体験

学生たちは異なる感覚を補完する技術が音楽体験を広げる可能性を持つことを学びました。最後に、金箱先生は「聞こえる・聞こえないは個々の特性であり、それぞれが異なる方法で音楽を楽しめます」と語り、共遊楽器の理念が多様な人々の音楽体験を広げることを印象づけました。

講師プロフィール



金箱淳一 かねばこじゅんいち
楽器インターフェース研究者、Haptic Designer。神戸芸術工科大学准教授。障がいの有無にかかわらず、共に音楽を楽しむ「共遊楽器」(作家による造語)を研究・開発している。作品「楽器を纏(まと)う」の開発経験を基に東京2020パラリンピック閉会式の演出協力、ほかクライアントワークも多数行う。作品「音鈴 - 信濃」 「Vibracion Banco」は長野県立美術館に収蔵。

レポート詳細



第8回～第15回

第1回から第7回までのインプット授業を踏まえて、学生たちは、1月に開催したコンサートに向けた情報保障の方法について、3つのグループに分かれてアプローチを検討し、実施していきま

した。後半の第8回から第15回の授業では、具体的にどのような方法で音楽コンサートの情報保障をするのか、聴覚障害者を交えて検討を重ね、実践（p.2～7参照）と振り返りをしました。

1つ目のグループは、「あじみずも」という楽曲について考え、身体表現を用いた音楽の伝え方を模索していきま

した。音の高低を波形で示し、演奏方法をライブカメラで撮影して見せるといった可視化の方法を検討し、ピアノの音を振動でも感じてもらえるよう風船を活用する方法なども考えま



第9回 情報保障の考察。実際に楽曲「あじみずも」を声を出し、身体を動かしながらやってみる

した。3つ目のグループは、「アンサンブル」について考えていきま

した。楽器ごとにスポットライトや照明の色を変化させるアイデアや、蓄光テープを活用して演奏者の指の動きなどに注目させるアイデアを考案し、音のハーモニーや特徴を伝えようとし



第11回 情報保障について演奏者や当事者との協議。コンサートでの曲を演奏し、学生たちは楽器から伝わる振動の違いを体感

た。制作のプロセスについては、聴覚障害のある当事者からアドバイスをいただきました。Sasa-Marieさんや福岡県聴覚障害者協会青年部の方々からは、「情報保障が単なる補助ではなく

音楽体験を共有する役割を持つべきだ」との意見が出ました。また河合拓始さんとのやりとりでは、振動や身体表現を活用した音楽の伝え方がよいのではないかと話し合いました。

コンサート終了後の振り返りの授業では、各グループによる成果と課題を共有しました。成功した点として視覚的工夫や観客が楽しめたことが挙げられましたが、伝える情報量の調整や伝え方についての課題も残りました。また、音楽の本質を維持しつつ、どの程度まで翻訳や可視化するのが、映画などの字幕や舞台手話通訳とも共通するような課題であることが議論されました。担当教員の長津先生からは、「翻訳や通訳のように、情報を要約しつつ本質を伝えるクリエイティブな工夫が重要」との指摘とともに「今回のプロジェクトでの経験を、今後の自身の研究や実践にも活かしてほしい」とのアドバイスもありました。



第12回 情報保障についてのプロトタイプ提示。楽曲「ピアノ音楽・第二」で、どう映像を見せていくかを検討

レポート詳細



第8回



第9回



第10回



第11回



第12回



第15回

第8回 情報保障のアイデア出し

開催日時 2024年11月21日（木）18:30～20:00
ゲスト講師 Sasa-Marie
福岡県聴覚障害者協会青年部
（渡邊 梨乃、穂田 誠、徳田 貴昭、池田 鈴）
受講人数 13名

授業概要 コンサートの演目についての説明のあと、3グループに分かれて、何ができそうか具体的に話し合いました。

第9回 情報保障の考察

開催日時 2024年12月5日（木）18:30～20:00
ゲスト講師 鈴木 玲雄
福岡県聴覚障害者協会青年部
（渡邊 梨乃、久住呂 文華、徳田 貴昭）
受講人数 12名

授業概要 前回で思い描いた情報保障のイメージをさらに膨らませ、次回の授業で簡易的なテストプレイができることを目的に進めました。

第10回 情報保障についてプレゼンテーション

開催日時 2024年12月12日（木）16:40～19:00
ゲスト講師 Sasa-Marie
受講人数 12名

授業概要 聴覚障害者にとっての音楽について研究をしているSasa-Marieさんに、各グループが考えているアイデアを見てもらい、アドバイスいただきました。

第11回 情報保障について 演奏者や当事者との協議

開催日時 2024年12月19日（木）18:30～20:00
ゲスト講師 河合 拓始
福岡県聴覚障害者協会青年部
（渡邊 梨乃、穂田 誠、久住呂 文華、徳田 貴昭）
受講人数 11名

授業概要 コンサートの演奏者・河合拓始さんに即興性がある曲などを演奏していただき、学生のアイデアへのアドバイスもいただきました。

第12回 情報保障についてプロトタイプ提示

開催日時 2025年1月9日（木）16:40～18:40
受講人数 10名

授業概要 学生どうしてプロトタイプを見せ合いながら課題を共有し、グループ内とは違う視点から意見をもらいブラッシュアップさせていきました。

第13回 情報保障 リハーサル

開催日時 2025年1月16日（木）18:30～20:00
ゲスト講師 鈴木 玲雄、河合 拓始
福岡県聴覚障害者協会青年部
（渡邊 梨乃、穂田 誠、池田 鈴）
受講人数 12名

第14回 コン서트当日 情報保障 本番

開催日時 2025年1月23日（木）19:00～20:30
受講人数 12名

第15回 プロジェクト振り返り

開催日時 2025年1月30日（木）16:40～18:40
受講人数 11名

授業概要 本番の映像を見ながら、グループごとに振り返りをしました。



第13回 情報保障 リハーサルの様子

きこえないあそび。きこえないムジカ。

2022年度
アーカイブ

開催日時 2023年2月4日(土) 13:00~17:30、5日(日) 10:00~15:30
会場 九州大学 大橋キャンパス 多次元デザイン実験棟、音響特殊棟
受講人数 13名 ワークショップ参加人数 310名 参加費 無料

2022年度は26回の授業を行い、「聴覚障害のある人と音楽を共有する」ことをテーマにワークショップを考案し、福岡県聴覚障害者協会青年部と共同でイベントを実施しました。イベントは2日間で310名の来場者を数え、整理券が必要なイベントは早々に埋まってしまうなど大盛況でした。また、来場者の約半分が聴覚障害のある人だったことは特筆できます。ここでは、開催した10のワークショップの中から5つをピックアップしてダイジェストにてお届けします。



音に出会う

VRゴーグルを用いて360度の映像を体験できる企画。映像には日常の風景が映し出され、音は流れない。その代わりに、画面内に「ザワザワ」「トントン」などのオノマトペが多数表示される。これにより参加者は、音を「聞く」のではなく「見る」ことができ、音の発生源や種類を想像しながら周囲を見渡す体験ができた。



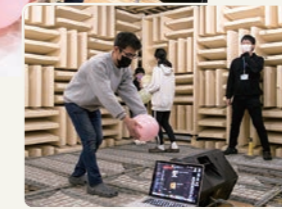
オノマトペさがしウォーク

大橋キャンパスを散策しながら、音や様子を言葉で表現する「オノマトペ」を探す体験を行うプログラム。たとえば、雨の音を「ザーザー」「しとしと」「ぼつぼつ」と表現するように、身の周りの風景に合うオノマトペを考えたり、オノマトペに合う景色をゲーム感覚で見つける体験など、ワークショップ形式で展開された。



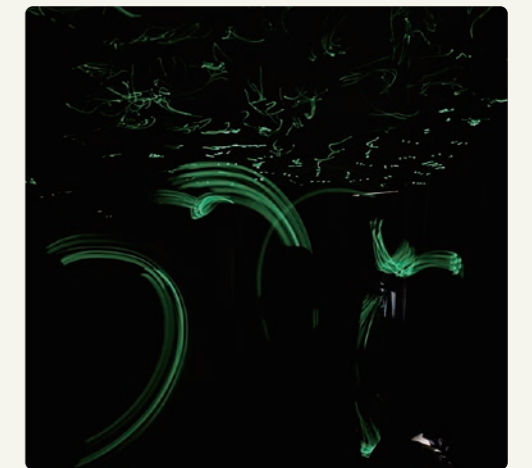
ガンガン!! ガンサンプル

楽器を自由に鳴らし、音やリズムを探求する体験型コーナー。参加者は、並べてある楽器をたたいたり弾いたりしながら、音の響きや他者の動きをまねることで即興的な音楽づくりを楽しむ。学校で学ぶ「正しい音楽」とは異なる視点から、偶発的な音の響きを共有し、共に音楽を創り出す機会を提供した。



ひびきであそぼ

音の特性や多様性を体感するために、大橋キャンパス内の3つの部屋を活用した体験型プログラムを実施。1つ目の部屋では、響きがあふれる残響室で音楽を聴き、音の広がりや反響を感じてもらった。2つ目の部屋では、響きがほとんどない無響室で同じ音楽を聴き、音環境の違いによる変化を体験してもらった。そして3つ目の部屋では、音を振動に変換し、音を「見たり」「触ったり」することで、聴覚以外の感覚で音を捉える試みを行った。



ふうせん 風宴

暗闇の中で風を感じ、光に囲まれながら木の葉のように自由に身体を動かす体験型プログラム。音が「見えないが聞こえる」存在であるように、風も「見えないが感じる」存在であることに着目し、聴覚の違いにかかわらず、光と風が織りなす宴を共に楽しめる場を目指した。

福岡県聴覚障害者協会青年部企画

音のない世界60分を楽しむ深海駅

小学3年生から参加できる体験型プログラム。きこえない人の世界を深い青の「海」にたとえ、音のない空間を楽しむために「深海駅」を舞台とした。駅はきこえない人にとって困難が生じやすい場所の一つだが、本企画ではその空間を音のない60分間の遊び場として提供。音声言語を使わずにスタッフや参加者と交流し、発想力や想像力を育む内容となった。



そのほか実施したワークショップ

福岡県聴覚障害者協会青年部企画

音のない世界の写真展/ろう者の文化展

きこえない人たちの日常や文化を紹介する展示企画。きこえる人が多い社会で何を感じているのかを写真や漫画作品などを通じて伝えていった。

音響技術に関する展示

聴覚障害のある人の生活を豊かにし、共に音楽を楽しむための技術紹介や展示を実施。既存の技術や開発中の技術の利便性・展望を伝える場をつくった。

ドンドン!! ドンサンプル

打楽器を中心に構成した演奏会を、間近で体験できる企画。演奏者に近づいたり、楽器に触れたりすることで、音楽を能動的に体験できた。

音を使った塗り絵ゲーム

カメラの前に立つと顔が検出され、画面上に塗り絵の枠線が表示。声を出すと音に応じて絵に色が着き、音の周波数によって色が変化する塗り絵ゲームを提供した。

九州大学における聴覚障害学生への支援

インクルージョン支援推進室の協力のもと、九州大学が実施している聴覚障害のある学生に向けた支援の現状について紹介した。

みんなが楽しめる音楽とは？

～ きこえない × きこえにくい × きこえる × 音楽 ～

2023年度
アーカイブ

開催日時 2024年2月3日(土) 15:00～18:00

会場 九州大学 大橋キャンパス 音響特殊棟 録音スタジオ

受講人数 14名 ワークショップ参加人数 15名(先着順) 参加費 無料

前年度に引き続いて「音楽体験の共有」をテーマとし、より聴覚障害のある人との密なやりとりを経た企画を生み出すことを目指しました。授業では福岡県聴覚障害者協会青年部や九州ろう学生懇談会のみなさんにご協力いただき、最終的にプレゼンテーションとデモンストレーションを行い、今後の可能性を議論しました。ここでは、イベントの内容をダイジェストにてお届けします。



絵文字譜であそぼう！

スマートフォンなどで用いられる「絵文字」を楽譜に見立てて演奏してみるブース。参加者はまず好きな絵文字をいくつか選んで、表現したいもののストーリーを作る。それを手がかりにして打楽器を使って演奏することで、どの絵文字を演奏しているか当てるゲームを行った。

曲一緒かな?!クイズ

聴者の1人が、ある音楽をヘッドホンで聴き、表情や身体の動き、絵などでその楽曲のイメージを表現。参加者はその情報から、どんな曲なのかを当てるゲーム。伝えたいことを伝えるには、どのような情報をどのように用いるかの重要性を知ってもらうことを目指した。

音の方向を風で感じる

聴覚障害のある人の生活に着目して、聴者であれば気づく生活の中のさまざまな音を「風」に変えて、空間音響を風で再現するデモンストレーションを行い、意見交換するブース。実際の生活場面の映像を見ながら、通知音が鳴るタイミングで風が吹く場を体験できる時間をつくった。



後半のディスカッション

ディスカッション

3つのワークショップを体験したあとは、参加者全員でディスカッションを行いました。

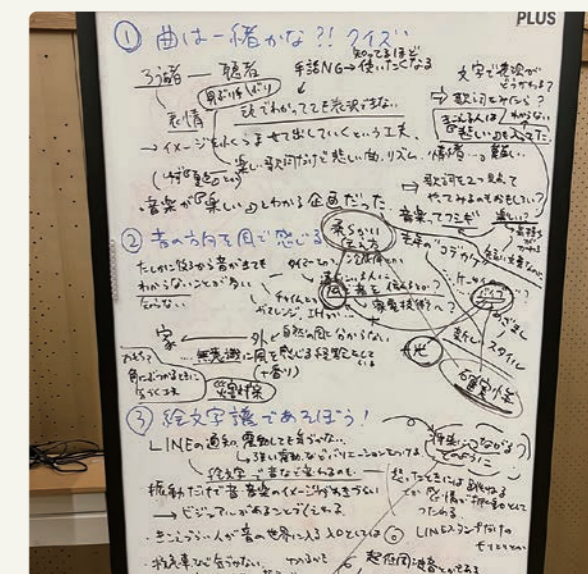
「曲一緒かな?!クイズ」は、曲を伝える上で言葉を使うのがNGというルールでしたが、手話も同様にNGだったため、手話を知っている立場ほど使いたくなる、という感想が共有されました。また、「楽しい歌詞だけれど悲しい雰囲気曲をどのように表現するのがよかったのか」という投げかけもされ、歌詞が付いている音楽を総合的に伝えることの難しさが共有されました。

「音の方向を風で感じる」では、「確かに後ろで音が鳴っていてもわからない」「知らないままであることが多い」という、ろう者のエピソードが紹介されました。光や振動で伝えるだけでなく、風で伝えることが、より柔らかい情報の伝え方として今後、可能性があるのではないかという議論も交わされました。

「絵文字譜であそぼう!」については、振動だけでは音や音楽のイメージが沸きづらいこともあり、ビジュアルがあることで伝わりやすくなるということが共有されました。「聞こえづらい人が音の世界に入るための入り口としてはわかりやすい」という意見があり、「LINEなどの通知でも絵文字に応じて振動の強さが変わるなどのバリエー

ションが付くというのではないか」という議論などもありました。

また、今回はろう者の人たちとともに企画を考案しましたが、中途失聴の人たちへはまったく異なるアプローチが必要であるということも共有され、今後の活動へとつながる議論も行われました。



ディスカッションで使われたホワイトボード。議論が繰り広げられた様子がわかる

スタジオプロジェクトで学んだこと、 実社会で活かせること

2人の卒業生に、スタジオプロジェクトでの経験や感じたことについてうかがいました。



音楽と共生社会。

視点が広がるたびに、世界は広がっていく

足の怪我により車椅子や松葉杖で移動した経験をきっかけに、バリアフリーやインクルージョンに興味を持ち、学部3年より九州大学アクセシビリティ・ピアサポーターの一員になり、手話やノートテイク、カラーユニバーサルデザインなどの活動に参加しました。また、オーケストラのマネジメントに関心があり、大学院では芸術工学府に進学しました。ですが、当初は音楽マネジメントと障害に関する活動が交わることはないと思っていました。

スタジオプロジェクトなどを通じて、きこえの違いに関係なく身体の動きや視覚的なリズムで表現することを受け取れるようになり、聴覚障害者と音楽のつながりを諦めるのではなく、お互いの文化を尊重しながら新しい関係性を探せばいいのだと思うようになりました。最近も、ろう者の友人と遊びに行った際、「コーヒーをテイクアウトして歩きながら飲もう」と誘ったところ、「コーヒーを持つと手話でおしゃべりできないじゃん」と言われました。このような小さな発見の積み重ねを通して、「障害のある人」とひとくりにするのではなく、「一人の人」として向き合う意識が、自分の中に育ってきたように感じます。

「障害のある人」という言い方もあまり好きではないのですが、彼ら・彼女らからはたくさんの学びがあり、そのたびに、自分の視野が広がるような気がします。この感覚は、大学での経験で得られたものだと感じています。そして、一度その感覚や視野を知ってしまうともう戻れません。

大学での経験を糧に、今は東京都内の公立劇場でアクセシビリティ整備の業務を担っています。障害の有無にとらわれずに1人のお客様として尊重する気持ちを忘れることなく業務にあたりたいです。

正田 弥紅 ひきたみく

2022年度 スタジオプロジェクト受講
2024年3月九州大学大学院芸術工学府修士課程修了
現在) 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 事業企画課 事業調整係 社会共生担当



聞こえない人、聞こえにくい人の

コミュニティの一つのかたちを実感

中学生のころに、祖母が突発性難聴で急に耳が聞こえなくなりました。読唇や手振り身振りでほぼ理解でき不自由なくコミュニケーションは取れていましたが、音楽などを楽しもうとするとやはりハードルがあるようでした。以前は祖母の前でよく楽器を弾いていたのですが、だんだん何を楽しみに僕は弾いていたんだろうと考えるようになって。そこからスタジオプロジェクトを機に、情報保障の概念を勉強したい、当事者の人たちが音楽を楽しめないのではなく、こちら側が歩み寄って伝えれば楽しめるかもしれないという感覚を得ました。

プロジェクトの本番で、ホール内でろう者の写真や漫画を集めた作品展がありました。それで鑑賞で何か困りごとはないかなと会場に入ってみると、すごく静かです。でも見渡すと、みなさん手話でたくさん会話されているんです。僕がわかってないだけで、たくさんコミュニケーションがそこにある。耳が聞こえない人、聞こえにくい人のコミュニティの一つのかたちを実感した体験でした。

僕はいま音響通信技術の会社で働き、スマホやスマートグラスで映画の字幕と音声ガイドを楽しめるアプリや、劇場での鑑賞者用の字幕メガネの制作に携わっています。どちらも鑑賞者用ですが、提供する側のことも考えながら制作をしています。たとえば映画館で字幕メガネを貸し出すサービスの受付や窓口を、よりスムーズにできないかという視点。そこにあるハードルをうまく変えていかなきゃ、みたいな問題意識も持っています。これは、多くの聴覚障害のある方とたくさんコミュニケーションを取り、一緒に仕事をしたプロジェクトでの経験によるものだととても感じます。

仁比 峻輔 にひしゅんすけ

2022年度 スタジオプロジェクト受講
2024年3月九州大学大学院芸術工学府修士課程修了
現在) エヴィクサー株式会社
[▶ p.14 に関連記事あり]

2022年、聴覚障害者の方々をお招きして、音楽と一緒に楽しむ方法を考える授業に携わるようになった私は、学生と一緒に悩む日々を過ごすことになりました。

ゲスト講師の鈴木玲雄さんに、音の響きの違いを振動で体験してもらったときに言われた言葉は、「これって音楽なの?」でした。学生がプロトタイプを披露する度に「これって楽しい?」と非常勤講師のSasa-Marieさんから問いかけられました。また、指導教員の長津先生は、最初の授業で「あなたにとっての音楽とは何ですか?」と学生に問いかけました。

単なる“音”ではない“音楽”が聞こえないということはどういう事なのか、音楽が人に伝わる時、何がどう作用しているのか、ヒントは自分の感覚の中にあるような気がします。その感覚は、そもそも聞こえの違いに関わらず、人それぞれ違うものだから一概には言えないとも思います。

モヤモヤ考えるとき、3人からの問いかけが私の頭の中に浮かんできて、自分本意な考えではきこえる人の傲慢になりかねないという考えになり、結局、当事者を交えて考えなければ先へ進むためのヒントは見つからないという思いに至ります。

さて、この授業を初年度から振り返ってみると、最初は、学生たちと一緒に聴覚障害について学ぶところから始まりました。

たとえば、聴覚障害の場所によって聞こえの違いが生じることや、手話は言語であること、聴覚障害は見えない障害と言われるほど、社会的な配慮がされにくい生活環境にあることなど、知らなかったことがたくさんありました。また、聞こえない人たちの中には、リズムや音階をみんなと合わせることを強いられた経験から、音楽が嫌いになっていたり、自分とは無縁のものと思っていたりする人がいることなども、当事者を交えた授業の中で知ることができました。

2年目は、聞こえの程度や聞こえなくなった時期によって、音や音楽に対する感情の持ち方が違うこ

とを知り、聞こえない人の多くは歌詞やダンスを頼りに音楽とつながって、楽しんでいることを知りました。私は授業を重ねる度に、ほかにもいろいろと、聴覚障害者の文化や生きにくさを知りました。

一方、聴覚障害と音楽という難しい課題に取り組む学生たちは、1年目は、音を聴覚以外の感覚で楽しむ方法や楽器に親しむ場のあり方を提案しました。2年目は、音楽の歌詞をゲーム化して情緒を伝えたり、リズムで感情表現を伝えてみたり、音楽をモチーフに楽しむワークショップを開催しました。そこから、コンサートの情報保障へステップアップした3年目は、聞こえない人たちに、今、そこに音があること知らせ、それが何を意味しているのかを伝え、音楽鑑賞として楽しんでもらわなければいけませんでした。

自分たちは聞こえない人たちに音楽の何を伝えたいのか、音楽として聞こえない部分をどのように変換して伝えればいいのか、思い悩むシーンが度々あり、当事者から意見を聞きながら考えを詰めていきました。その中で、情報の全部を伝えようとすると情報過多になってしまい、簡略化し過ぎると伝えたいことが伝わらないということが起こり、その折り合いをつけるのがとても難しく、“翻訳”の難しさに直面しました。

しかし、今回、奏でられている音の存在を単に説明するだけではなく、音楽の身体性やハーモニー、高低差を伝える試みができたことは、音楽の情報保障として、スタート地点に立てたように思います。これは音楽なのか? 楽しいのか? 音楽とは何か? 何を伝えればいいのか? どう伝えればいいのか? 問いはぐるぐると私の中でも混ざり合いますが、実は、答えは一つではなく、“翻訳”をキーワードに聴覚障害者と音楽が、さまざまな角度からつながっていくことが、一つのヒントになるのではないのでしょうか。

まだまだ、試行錯誤は続きますが、きこえの違いに関わらず、音楽を楽しめる未来が少しずつ見え始めているように思います。



眞崎 一美 まさきひとみ

九州造形短期大学(現・九州産業大学造形短期大学部)を卒業後、舞台技術の会社で舞台美術や舞台管理の仕事に携わる。2011年に公共ホールの企画事業担当者となり、社会包摂につながる事業に関心を持つようになる。現在は、地域の子どもとアートなつながりを持つ場として駄菓子屋を経営する傍ら、アートイベントのお手伝いなどを行っている。九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室にも勤務し、本プロジェクトの担当スタッフとして関わる。

